

# 社会言語科学における対照研究の可能性

企画責任者：多々良直弘(桜美林大学)

話題提供者：新井保裕(東洋大学) 植野貴志子(東京都市大学)

櫻田怜佳(日本女子大学) ツォイ・エカテリーナ(一橋大学)

野村佑子(順天堂大学) 望月雄介(名古屋大学)

八木橋宏勇(杏林大学)

## 1. はじめに

言語の対照研究は、複数の言語を比較対照し、様々な言語現象において観察される相違点と類似点から分析対象とする諸言語の言語体系やコミュニケーションの特徴を明らかにすることを目的としている。対照研究は社会言語科学と非常に関連性の強い研究分野であり、これまでも社会言語学会において対照研究をテーマにしたシンポジウムやワークショップが開催され、学会誌『社会言語科学』においても第21巻第1号で特集号「人・文化・社会を理解することばの対照研究」が組まれた。これまでは日英語を中心に日韓や日独など二言語を対象にした研究が多かったが、近年では三言語以上の比較対照研究も行われている。様々な言語文化的背景を持つ人々がコミュニケーションをとる機会が増えている現代社会において、複数の言語を対象とした研究を更に進めること、また複数の比較対照研究の成果を統合的に解釈し、さらなる発展の可能性を模索することも重要であるだろう。

言語の対照研究を行うための理論的枠組みや方法論は言語学の諸分野において様々であるが、本ワークショップでは、自然会話やメディア・ディスコース、翻訳などの様々な言語データを用いて日本語と英語、韓国語、中国語、ロシア語などを比較対照した研究について各話題提供者がその成果を報告し、その後それぞれの研究成果の関連性や社会言語科学においてどのような対照研究を今後展開していくことができるのかを考察して行く。また、このような対照研究の成果が国際化が進む現代社会においてどのような貢献ができるのかという点についても議論を展開する。

## 2. 日米女子大学生の言語行動と自己対社会観—「ミスター・オー・コーパス」をデータとして—

(植野貴志子)

本研究では、日本人およびアメリカ人の女子大学生ペアが「びっくりしたこと」という同一のテーマを与えられて会話をするとき、二者が互いにひとまとまりの経験談を話すのか、あるいは、まとまった経験談を話すことなく、とりとめのない雑談のようなやりとりを展開するのか、といった「談話タイプ」の傾向を明らかにしたうえで、その背後にある自己対社会観を「ウチ・ソト・ヨソ」(三宅, 1994)の概念に基づいて考察する。

データとして使用するのは、「ミスター・オー・コーパス」(井出・藤井編 2014)に含まれる日本語およびアメリカ英語の二者会話、各10組である。会話参加者は、日本人およびアメリカ人の親しい間柄にある女子大学生ペアである。カメラの前に着席した二者に対して、指示者が「びっくりしたことについて、5分間自由に話してください」と伝え、退室した。その後、二者のみが部屋に残って会話を行った。

日本人ペア、アメリカンペアの言語行動を把握するため、市川・徳永(2007)を参考にして、各会話をトピック毎に分割した。市川・徳永(2007)は、本研究と同じデータを分析し、(1)明示的なトピック遷移の合図、(2)初出の内容語を含む発話、(3)会話の主導権の交代等、トピックの区切りを同定する発話の特徴を提示している。これに基づいて日英語会話をトピックの区切りで分割したところ、日本語会話10組には合計48、英語会話10組には合計38のトピック区分が検出された。さらに、各トピック区分におけるやりとりを観察した結果、日英語共通して、トピック区分は次の3つの談話タイプに分類された。(1)一人語り：一方がひとまとまりの経験談を語り、他方が聞く。聞き手の反応の9割以上をあいづち的反応が占める。(2)協働語り：一方がひとまとまりの経験談を語り、他方があいづち的反応と実質的発話の両方を用いて働きかける。語りの内容をめぐる二者のやりとりを含む。(3)雑談：まとまった経験談を含まず、二者が自由度の高いおしゃべりを展開する。

表 1. 日本語会話と英語会話における談話タイプ別トピック区分数(%)

	日本語会話	英語会話
一人語り	9 (18.7)	18 (47.5)
協働語り	21 (43.8)	18 (47.5)
雑談	18 (37.5)	2 (5.0)
合計	48 (100.0)	38 (100.0)

表 1 に示す通り、英語会話では「一人語り」と「協働語り」の合計が全体の 95% を占めている。このことは、アメリカ人ペアは、全般に、一方がまとまった経験談を話し他方が聞く、または一方の経験談に他方が反応し、その話をめぐって二人でやりとりを展開する、という言語行動をとっていることを意味している。日本語会話では「協働語り」(43.8%) に続いて、アメリカ

人ペアにはほとんど見られなかった「雑談」が 37.5% を占めていることから、日本人ペアには自由度の高いおしゃべりを展開する傾向が顕著であることが分かる。この違いは、どのように説明されるだろうか。

三宅 (1994) は、日本人とアメリカ人の自己対社会観の異なりを「ウチ・ソト・ヨソ」の概念を用いて説明している。ウチは自己の周りの親しい人々、ソトは自己やウチと関連のある人々、ヨソは自己やウチとは関係がない人々を指す。日本人の場合、自己とウチの境界は曖昧であり、ときに自己はウチと同化する。またウチとソト、ソトとヨソの境界ははっきりと区切られていて、自己はソトに対しては丁寧な態度をとるが、ヨソに対しては無関心である(教授(ソト)には敬語を使うが、全くの他人(ヨソ)には気配りをしないといった具合に)。一方、アメリカ人は、自己は周りのウチとはっきりとした境界で区切られ、親しい間柄であっても自己の内面と一線を画すが、ウチ・ソト・ヨソの境界は曖昧である。アメリカ人のスモールトークを分析した井出 (2014) は、三宅 (1994) が指摘するアメリカ人の自己対社会観は、公的場面での自己開示の重視、個と個を基軸とした会話といったアメリカ社会の理念に沿うものであると論じている。

日本人ペアがカメラの前で普段のおしゃべりのような会話を行うのは、ウチの関係にある二者の境界が曖昧であるため、同化し合って二人の狭い場をつくり、ある種の排他性を醸しながら、その中で行動しているためであろう。二者にとっては、指示者もカメラの向こうの未知の人々もヨソである。アメリカ人ペアが、個々に経験談を語るのは、親しい友人同士(ウチ)であっても、相手の内面とは一線を画しており、率直な自己開示に価値を置いて、個と個を基軸とした会話をしているためであろう。ここには、ソト・ヨソに対する排他性や無関心はほとんど感じられない。日本人、アメリカ人の言語行動や自己対社会観は、各々の言語文化のあり様を反映している。異なる言語文化において暗黙に了解されている言語行動パターンを明らかにする対照研究は、異文化理解のための基礎知識を提供するという重要な役割を担っている。

### 3. パブリック・スピーチにおける聴衆への働きかけの表現に関する日英語対照研究 (櫻田怜佳)

#### 3.1 研究の目的

パブリック・スピーチとは、語り手が自分のアイデアを公にすることであり、人々とアイデアを共有したり、人々に影響を与えたりする手段であると考えられている (Lucas 2011)。スピーチの語り手は、聴衆に影響を与える工夫として、どのような言語表現を用いているのだろうか。本研究は、アメリカ英語母語話者と日本語母語話者がそれぞれの母語で行うパブリック・スピーチ (TED Talks) において、聴衆に働きかける機能を持つと考えられる言語表現のうち、命令 (行為指示) 表現と疑問形式の表現が用いられる場面に焦点を当て、その特徴を明らかにすることを目的とする。

#### 3.2 先行研究

命令 (行為指示) 表現や疑問形式の表現は、発話行為理論 (Searle, 1969) や行為要求表現に関する研究 (仁田, 1991) において、聞き手に行動を促す表現として説明される。政治家による演説や商品の宣伝などのコンテキストにおけるパブリック・スピーチでは、注目を引く (attention getter) 修辭的手段としてあげられることがあるが、命令表現や疑問形式の表現のスピーチにおける形式や機能について、異なる言語を均等な立場から比較するものは見当たらない。

#### 3.3 データと分析方法

本研究では、TED Talks というパブリック・スピーチをデータとして用いる。これは、多様な分野の人物が登壇し、多人数の聴衆に向けて「広める価値のあるアイデア」というコンセプトのもと、15 分程度のスピーチを行うものである。現在 60 カ国以上の世界各地で開催されており、異なる言語を比較対照して研究することが可能なデータであると考えられる。本研究では、以下のスピーチを用いる。

- アメリカ英語母語話者が英語で行う TEDGlobal (2012 年) におけるスピーチを計 12 本
- 日本語母語話者が日本語で行う TEDxTokyo (2011~2013 年) におけるスピーチを計 12 本

### 3.4 分析結果

#### 3.4.1 命令（行為指示）表現

スピーチにおいて用いられる命令（行為指示）表現は、1)聴衆に行動を促す機能を持つものと、2)スピーチの進行に関わる機能を持つものという2種類に大別できる。本研究では、聴衆に行動を促す機能に着目する。

英語母語話者のスピーチでは、命令文の形をとる発話や、話者の判断を表す modal operator を伴う発話が観察された。発話に用いられる動詞は、思考 (consider, think) や参加・共有 (participate, get involved, share) という要素を含むものが使用される傾向が見られた。一方、日本語母語話者のスピーチでは、スピーチの最後に、「試してください」「覚えてほしい」「見直していただけたら」など、聴衆に望む具体的な行動を表現する発話が観察された。

#### 3.4.2 疑問形式の表現

疑問形式の表現を用いて聴衆に問いかける場面では、問いに対する解答が直後に示される局所的なもの (local theme) と、問いの対象が広い範囲にわたり解答が引き伸ばされる大局的なもの (global theme) という2種類の構造が見られた。

英語母語話者のスピーチでは、global theme に関わる問いかけは、スピーチの中核をなす主題を提示する際に用いられ、疑問詞を伴う疑問文 (open-ended question) によって発話されることが多く見られた。local theme に関わる問いかけは、問いと解答が直結し、用語や概念の解説を導いたり、話題の焦点を絞ったり、確信を持たせる機能を有し、スピーチの至る所に用いられていた。日本語母語話者のスピーチでは、特に、文末に「～ではないか」という否定疑問の問いかけが多くなされていた。否定疑問には、聞き手の反応に関する何らかの判断への予測 (bias) がはたらいていると考えられており (安達 1999), スピーチにおいて語り手が使用する際には、問いかけに対して聴衆も理解や共感を示してくれるであろうという語り手の判断が含まれていると考えられることから、聴衆と理解の基盤を構築できていると想定した上でなされた発話であるといえる。

### 3.5 考察とまとめ

英語母語話者のスピーチでは、命令（指示）表現や疑問形式の表現が発話されるまさにその時に、これを聴衆が共に考えるというあり方が望まれていると考えられる。日本語母語話者のスピーチは、各エピソードまたはスピーチ全体の最後に用いられる傾向があり、積み重ねられるエピソードの中で聴衆と理解の基盤を共有した上で、聴衆に働きかける言語的機能が用いられているといえる。英語母語話者と日本語母語話者のスピーチを比較することによって、同じ発話行為の中に位置づけられる表現にも、それぞれの言語話者に異なる使用の実態があることを観察することができた。さらに、各言語話者がスピーチをどのように運んでいるかが見出され、異なりがあることが分かった。

## 4. 解放的語用論から見る日本語談話コーパスにおける「思う」を伴う引用

### —英語談話コーパスとの比較から— (野村佑子)

日本語の談話を観察すると、「思う」という思考動詞が見られる。例えば、TOKYO2020の公式HPでインタビューに答えるアンバサダーは「しっかり盛り上げたいと思っております」のような発言をしている。これは、「しっかり盛り上げたい」という被引用部と「思っております」という引用部を「と」でつなぐ、引用形式の発話である。「盛り上げたいです」と言っても、同様の内容は伝わるものの、「～たいと思っております」のように思考動詞「思う」を伴う引用形式を用いるのである。ところが、同HPの英語版では、“We”ll live up the event as much as we can”のように訳され、字義通りの翻訳となる think を伴った引用形式は用いられない。ここには、英語では日本語のような「思う」をここで用いることは不自然となるという語用の傾向の違いがあると考えられる。本発表では、日本語談話に見られる「思う」を伴う引用に焦点を当て、英語談話の比較を通して、その使用に関する特徴を明らかにすることを目的とする。

これまでの引用研究において、日英語の引用の違いについては、直接・間接の区別・差異を中心に詳細な記述がある(中園, 2006 他)。さらに、日本語の引用における文法に関する説明は、西欧言語に見られる観点からのものであるという指摘もある(山口, 2009)このような文法上の説明は、西欧言語にも共通する観点から日本語の文法をも説明したものと言える。談話における引用については、引用は「ある場で成立した言葉や思考を、現在の語りの場に引いてくること」(鎌田, 2000)と定義され、どの言語にも存在する現象として言語ごとの差異は注目されてこなかった。直接引用は会話においてその発話を際立たせる効果があることが主な指摘である(Clerk&Gerrig, 1990; Besnier, 1992; Fujii, 2006; 大津, 2005; 甲田, 2016; 他)。従って、日英語の引用の差異は、文法上では取り上げられてきたものの、談話上では注目されてこなかった。そこで、本発表では、コーパスデータにおける日英語の引用の分析により、談話上の差異を明らかにすることを旨とする。さらに日

本語の「思う」を伴う引用に焦点を当てるため、その特徴については、西欧言語に基づいた理論からではなく、解放的語用論（井出&藤井, 2014）の枠組みの中で解釈するものとする。そのため、「日本語の論理」（山口, 2004）や「純粋経験」（西田, 2018）を用いる。本発表が扱う談話データは、日英語間で比較可能なコーパスデータ（日英語母語話者同士二人組の会話（日英それぞれ 20 会話）の録音・録画）である。この中から、「思う」と、それに相当する think, be like などを抽出し、使用頻度と引用内容（どのような内容に対して「思う」が用いられるのか）を比較した。その結果、日本語母語話者は、英語母語話者の think 等よりも、高い頻度（約 2 倍）で「思う」を使用し、且つ、引用内容は独り言のような発話（e.g. 「あまり意味がないな」と思って）や、感嘆詞のみ（e.g. 「へっ」と思って）が多いことがわかった。

考察では、このような引用内容が、話者がその場で思わず発した独話であることを指摘し、独話+「思う」の形式を繰り返しながら語るという話し方は、聞き手に対し、心に浮かんだことをありのままの「純粋経験」として表出するものであることを示し、それを支えるのは、文構築は主語と「その時頭に浮かんだ内容」を結ぶことだとする「日本語の論理」があることを示唆する。

## 5. 聖書の対照研究（八木橋宏勇）

### 5.1 翻訳言語としての聖書と対照研究

聖書協会世界連盟(UBS)の2012年度資料によれば、聖書翻訳言語の総数は2,551言語に達したという<sup>1</sup>。聖書の多言語化に際しては、翻訳者や校正者に「オリジナル言語の内容を正確に意味深く表現してもらう」ことを目的に、聖書翻訳指導員なる専門家が「新しい翻訳の質を確かなものにするので、とりわけ、ギリシア語（新約）とヘブライ語（旧約）の原典に忠実なものにすること」（一般財団法人日本聖書協会ホームページ）において重要な役割を果たしているという。換言すれば、聖書のメッセージが正しく理解されるように厳格に翻訳がなされていると言える。

言語の対照研究に際しては、研究のデザインとして、比較の軸を設定することが求められる。その点、翻訳言語という性質上、聖書は多言語間での多様な比較を可能にし、対照研究に有益な言語資料を提供しうる文献であると言える。

### 5.2 聖書の対照研究

成瀬（1996）が指摘しているように、一般的に望ましい翻訳は「原文と訳文の理解価値の等価」が実現されていることとしても、こと聖書に関してはいくつか注意が必要である。聖書を対照研究の題材とする際には、数千年に渡る時間的隔たりや、社会文化的背景の相違は当然のことながら、「直接訳と間接訳にかかわらず聖書の翻訳者には、できるだけ原典の言語表現や表現形式を翻訳する側の言語に伝えようとする力が働く」（橋本 2005）ために、理解が容易に達成されない場合もある。たとえば、「創世記」(2.23)にある This is now bone of my bones, and flesh of my flesh. (ついに、これこそわたしの骨の骨、わたしの肉の肉（新共同訳）)は、2つの名詞を属格で結ぶことで最上のものを表すヘブライ語を逐語訳したもの（寺澤 2013）であるため、意味が分かりづらくなっている。ヘブライ語起源による分かりづらさの事例は、統語論に関わるものが多いが、代名詞化されずに繰り返される名詞の反復、同一ないしは類似の内容を異なる語句や文構造を用いて繰り返す平行体といった文体論やレトリックに関わる言語現象に対しても聖書は豊富な事例を提供してくれる。ここでは、メタファ表現を事例に、聖書を題材に対照研究を行う意義を論じたい。

### 5.3 聖書のメタファ分析とその意義

古英語期から現代英語期にかけて翻訳された英訳聖書・日本語訳聖書のメタファ表現は、（口承を経て長い年月をかけて文字化された経緯から不明な点も多々あるものの）そのほとんどが原典の言語のメタファに遡ると想定される（以降、紙幅の関係で日本語訳のみ記す）。1)「三日したら、ファラオーはあなたの頭を上にあげ、あなたを職務に復帰させます」（「創世記」40:13）、2)「顔の前で水のようにあなたの心を注ぎ出し」（「哀歌」2:19）、3)「怠け者は言う。道に子ライオンが、広場に雄ライオンがいると」（「箴言」26:13）を例にすると、1)は概念メタファ GOOD IS UP、2)は概念メタファ MIND IS A CONTAINER, FEELING IS A FLUID IN A CONTAINER、3)は概念メタファ LIFE IS A JOURNEY, STATE IS LOCATION に基づくと考えられ、現代を生きる私たちにも比較的理解が容易なメタファだと思われる。

一方で、メタファ（メトニミヤシネクドキ等を含む）を機能させる「百科事典的知識」は、時代・文化・宗教などが異なれば質的に大きな相違があると推測される。たとえば、4)「ヤハウエは私を遣わし、あなたに油を注いで、彼の民の王とされた」（「サムエル記上」15:1）は、国王を任命する儀式を描写した一文で、「聖化」を表す。古代パレスチナ地方において上質のオリーブ油を身体に塗る儀式が行われていたことを知らなければ理解ができないだろう。

<sup>1</sup> この数には、方言訳聖書（e.g. ケセン語）が含まれるほか、手話訳聖書（e.g. 日本手話）の製作も鋭意進行中のようなのである。

聖書を題材とするメタファの対照研究は、共時的な研究に基づいて構築されたメタファ理論の検証（場合によっては修正）や発展に有益な視座を与えてくれる可能性がある。メタファを生み出したり、理解されたり／されなかったりするメカニズムの精緻化に寄与する言語資料となりうるわけである。また、原典に忠実に翻訳される聖書であっても、その原則から外れる訳があるのも事実である。たとえば、「禁断の果実はリンゴである」と特定できる記述は聖書には本来はなく、ヘブライ語原典では fruit のように総称を表す語が用いられていたようである（橋本・八木橋 2011）。古英語訳聖書ではリンゴを中心としつつも果物一般を表すことができた *appelbæ* となっているものの、中英語訳聖書では明確にリンゴを表す *apple* と訳されている。ヘブライ語では上位概念を用いて表現する傾向があるという言語的特徴はあるにせよ、原典とは異なる訳がなぜ作られたのか、翻訳論的に大変興味深い事例も多々見つかる。

#### 5.4 さいごに

聖書の翻訳は実に多岐にわたる。たとえば、ハワイのピジン英語聖書 *Da Jesus Book* は言語変種の言語資料になるほか、PC 運動に関連した *NPIV*（『新約聖書と詩篇：差別のない聖書』）（寺澤 2013）といった取り組みは、差別表現をなくそうとする社会的な動きが聖書の翻訳に反映されており、社会言語学的な分析資料となりうるだろう。

## 6. 日韓語の対照研究（新井保裕）

### 6.1 日韓対照の意義

本節では日韓対照研究に焦点を当て、その意義、及び研究成果について述べる。

日本語と韓国語は、SOV 語順、膠着語、発達した敬語体系、漢語系語彙の使用という共通した特徴を持ち、類型論的に最も類似した言語だと言われることもある。またその言語を主に使用する、日本人と韓国人は「ひと」が類似している。さらにその言語が主に使用される日本や韓国は社会・文化的な共通面も多い。このように日韓では言語だけではなくひと・社会・文化も類似しており、言語体系及びコミュニケーションの特徴において大きな違いはないように思われる。しかしいくら類似しているとしても日韓が完全に同一というわけではなく、むしろ類似しているからこそ小さな違いが大きなものとして認識される。そうした違いは言語やコミュニケーションの習得にとって大きな困難となるが、一方でその違いこそが日本語または韓国語の特徴と言え、類似した言語との対照という別の視点を通じて、言語の特徴が新たにわかる。日韓対照は対照研究、及び多様な視点というアプローチで共通する社会言語科学の意義をより明瞭な形で示し得る。

### 6.2 日韓語の言語体系とメディア<sup>2</sup>

日韓語の言語体系についてはこれまで多くの対照研究が成されてきたが、言語単位の結合様式に注目すると、日本語は言語単位が高い独立性及び結合性を持つ一方で、韓国語はそれと同程度の言語単位では独立性を持たず、ある程度の言語単位の融合性が成立するとなかなか崩れにくいと言える。言い換えれば、日本語は「磁石」的な構造、韓国語は「チェーン」的な構造を備えている。そしてこの言語体系の構造差は通常の話しことば、書きことばだけではなく SNS というメディアの中にも現れる。日本語ではコピュラまたは形式動詞が省略された名詞止め文が多く現れるが（例：森チョコビ改めて爆誕）、韓国語では名詞述語文からコピュラが省略されずに、さらに名詞化辞「-m/um」が接続している例が多い（例：swuep encey-i-m（授業いつだ）<sup>3</sup>。「磁石」な日本語は言語単位の独立性が高いため名詞という言語単位だけで文を実現する一方で、「チェーン」な韓国語は各言語単位が融合してこそ文が実現される。こうした「磁石」と「チェーン」という言語構造差がメディアを問わず維持された日韓両語の特徴であることがわかる。

語尾が省略された表現に焦点を当てると、日本語の話しことば、書きことばでは「あつ<sup>0</sup>」などイ形容詞の語幹のみが独立した発話となるが、韓国語では難しい（例：\*tep<sup>0</sup>）。「磁石」な日本語では一つの言語単位をより小さく分けて用いることができるが、「チェーン」な韓国語では異なると解釈できるが、韓国語の SNS では語尾が省略されたものが見られる（例：kuleh-ci anh<sup>0</sup>?（そうではない?））。磁石やチェーンが条件によっては働きが変わるように、言語単位の融合性が高い韓国語も SNS というメディアの条件下ではその融合性が弱まり、言語単位の独立性が高まると言えるかもしれない。このように言語構造の基準となる共通モデルを設けることによって SNS という共時的変異についても分析及び考察しやすくなる。メディアが多様化した現代社会において言語とメディアの相関関係にも学際的に注目する必要があるが、言語だけでなくメディアの対照研究へと発展していくだろう。

<sup>2</sup> 6.2 節の内容は新井(2019a, b)による。

<sup>3</sup> 韓国語のアルファベット表記はイェール式に従う。

### 6.3 日韓コミュニケーションの特徴<sup>4</sup>

日韓コミュニケーションの対照研究も多くの先行研究があるが、中でも尾崎（編）（2008）は対人意識について日韓 2175 名にアンケート調査し、その結果をまとめた代表的なものである。しかし各アンケート項目を一つずつ分析しており異なる項目間の分析は行われていない。そこで二次分析を行い、複数項目を比較すると、「空間の公私性」は日韓それぞれの対人行動に与える影響が異なること、親近度の相対的な序列関係は日韓で等しくとも絶対的な親近度合いは異なることが示唆された。日韓対人行動モデルも次図のように修正できる可能性がある。

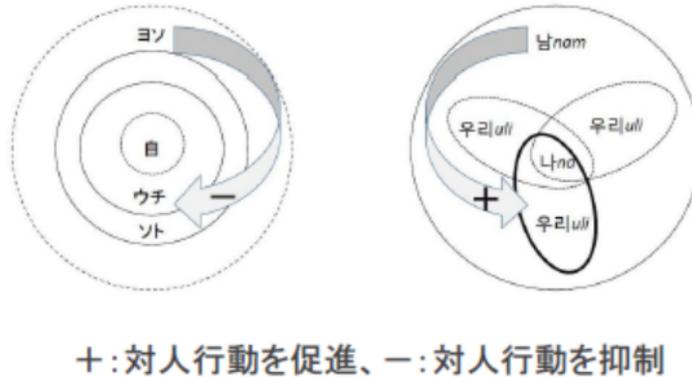


図1 日韓対人行動モデル

例えばこの図をもとに「人前〇〇〇いちゃつく」ということばについて考えれば、日本は「人前なのにいちゃつく」、韓国は「人前だからいちゃつく」と言える。国際化が進む現代社会において日韓両国人が対面コミュニケーションをとる機会が増加しているが、日韓は類似部分が多いゆえに、相手国に対して自国の「常識」を期待してしまい、そこに存在するコミュニケーション行動の小さな違いが却って誤解を生みやすい。対照研究の成果はこうしたミスコミュニケーションの防止、そして相互理解にも大きく貢献できるだろう。

### 6.4 小結

本節では日韓対照研究の意義及び研究成果について述べ、その展開可能性に言及した。日韓対照研究だけを取り上げても、言語の対照研究が現代社会に資するものは学術的にも実践的にも大きい。対照研究と社会言語科学に共通する学際・国際性が多様な言語社会に存在する課題の解明に繋がっていく<sup>5</sup>。

## 7. 三者間課題解決会話における相互行為の日露対照分析（ツオイ・エカテリーナ）

これまでの日露語対照研究では、主に文法や表現の意味が注目されており、分析資料として文学作品や映画の台本等のデータが広く用いられてきた。その中には、テンスやアスペクト、待遇表現等に見られる言語形式の相違を記述するもの（Кронгауз&Такахаси, 2002；中尾, 2003；金子, 2018 等）があれば、表現の意味概念の違いから言語の社会文化的な特性を論じるもの（田中&ケキゼ, 2005；ウェインベルグ&松村, 2015 等）もあり、様々な観点から比較が行われてきた。しかし、これらの研究は文レベルの分析を中心とするものが多く、自然会話データを扱った日露語対照研究は少ない。一方、会話研究においては、日本語およびロシア語、それぞれについて話者間の発話の重なりが多いという言及が見られる。Hayashi (1988) が報告しているように、日本語の会話ではあいづちによる発話の重なりが非常に多く、その重なりが3～4秒ほど続いても会話にはマイナス効果が生じないという。ロシア語についても、母語話者同士の会話には発話の重なりが多く（Земская, Китайгородская&Розанова, 1993；Ларина, 2009；Прохоров&Стернин, 2007）、英語やドイツ語に比べ、会話への割り込みに対する許容度が高いという指摘もなされている。このように他言語との対照研究からは日本語と

<sup>4</sup> 6.3 節の内容は新井(2019b)による。

<sup>5</sup> 中国朝鮮族の言語使用・意識を扱った新井ほか(2019)などが『社会言語科学』22 巻1 号の特集「日本語と日本社会をめぐる言語政策・言語計画」に掲載されたことも、国際化社会において一つの言語社会の研究がほかの言語社会研究に繋がっていることを示唆していると言える。

ロシア語で共通性が窺えるが、日本語とロシア語を比較した実証的な研究は管見の限りでは行われてこなかった。そこで、ツオイ(2016)は、三者間会話における話者交替の仕組みに焦点を当て、発話の重なり(「同時発話」,「オーバーラップ」とも言う)を対象に日露語の対照分析を試みた。その結果、ロシア語の会話における発話の重なりは、日本語よりも長く、頻度が高いものの、相手の発話を中断させるものであり、話者間の発話権の取り合いの際に生じるということがわかった。

本発表では、日露語対照研究のさらなる展開を目指し、日本語およびロシア語の自然会話における参加者の相互行為の異同について述べる(ツオイ, 2018)。本研究で用いた分析データは、親疎の異なる3人が課題解決に取り組んでいる会話であり、日露語ともに条件を統制した上で収集したものである。分析では、課題解決への提案が交渉される部分を抽出し、親疎関係による「提案交渉」への参与パターンの相違を検討した。ここでいう「提案交渉」とは、同意されなかった提案について参加者間で合意が得られるまでの話し合いを指す。本会話データにおける話し合いは、日露語ともに友人同士の「提案交渉」に初対面話者が参入する場合および、初対面話者と友人話者一人の「提案交渉」にもう一人の友人話者が参入する場合、という2つのパターンで展開していた。参入方法としては、3人目の参加者が「交渉中のどちらか一人を支持」することによって交渉に加わる場合および、「どちらも支持」せず「話し合いを方向転換する」、あるいは「交渉中の話者からアイデアを引き出す」場合が見られた。いずれの場合も3人目の参与が会話展開を大きく左右していた。日本語とロシア語のデータを比較したところ、両言語とも、後から交渉に加わる参加者からの支持により「2対1」の状況が作られ、多数決で話し合いの合意が得られることが共通して観察された。作業者間の協調性から見ると、言語にかかわらず共同課題解決においてはこのような相互行為は無標のものと考えられる。しかし、何らかの理由で相手に支持を示すことが困難である場合は、話し合いの方向を変えるという、有標の相互行為が行われることもある。これについては、本会話データでは日露語で多少の相違が窺えた。ロシア語では、「支持」という談話行為は心理的距離が小さく共感度の高い相手に対して行われ、心理的距離が大きい話者は中立の立場で「話し合いの方向転換」や「アイデアの引き出し」により「提案交渉」のやりとりに参入する傾向が見られた。一方、日本語のデータでは、後から「提案交渉」に参入する話者が「交渉中のどちらも支持しない」事例は少数であり、友人同士の話者は「親」の関係を利用し、友人のほうに支持を示すことにより話し合いに加わっていた。このように「交渉中のどちらも支持しない」という「提案交渉」への参入方法の事例からは日露語で親疎による差異が示唆された。

本研究は個々の事例の質的分析を通じて、全く異なる言語体系を持つ日本語およびロシア語での対人コミュニケーションのあり方を探求することを目指したものである。会話状況を統制することにより対照研究において重要である分析データの等価性の条件を満たすことができたが、量的な検討は今後の課題となる。

## 8. 中国語のあいづちから見る対照研究の可能性—談話スタイルとの関連性— (望月雄介)

### 8.1 あいづち研究

自然な会話を成立させるため、聞き手があいづちを打つことは一般的であり、あいづちは「会話を促進させる」、「話を聞いていることを表す」という役割を果たしているとされている。日本語のあいづち研究では、水谷(1983)、メイナード(1993)、堀口(1997)などが挙げられ、あいづちの形式、頻度、生起環境、日本語教育への応用といった、様々な観点から研究されてきた。本発表では、日本語のあいづち研究における定義や枠組みを援用して中国語のあいづちの実態を明らかにし、さらに、談話スタイルという観点から中国語と日本語のあいづちを比較分析したい。

### 8.2 あいづちの定義及び分析方法

本発表では、中国語・日本語共に初対面会話をデータとし、あいづちを以下のように定義する。

「あいづち」とは、話し手が発話権を行使しているときに、聞き手が話し手に対し情報を共有している、または理解していることを示す表現であり、話し手の発話権を奪う発話や承諾・拒否といった返答を表す発話はあいづちとしない。

本発表では、談話スタイルという観点から、中国語のあいづちの生起環境を分析する。あいづちと談話スタイルの関連性を分析するために、まず、談話スタイルを「語り」スタイルと「非語り」スタイルに大別する。スタイルは、「情報要求」、「情報提供」、「情報量」、「コメント」、「経験」、「状況」、「説明」、「意見」などのキーワードを以て判断し、それぞれの談話スタイルにおいて、あいづちがどのように打たれているかを分析する。そして、中国語の分析と同様に日本語のあいづちを分析し、中国語と日本語のあいづちの生起環境を比較分析する。

### 8.3 中国語のあいづち分析

中国語初対面会話に現れるあいづちを談話スタイルという観点から分析すると、「非語り」スタイルではあまり打たれず、以下の会話例のような「語り」スタイルで多く打たれるという特徴が見られた。ここから、中国語のあいづちの生起環境は、その発話がどのようなスタイルで発話されているかということに大きく関連していることが分かった。

OM16 : 我们…其实…搞对外汉语的话, 其实我们更更偏向于语言学这边儿(嗯)。对, 学的都是, 都是跟中文系的一起上的(哦哦哦)。

[僕たち…; 実際に…; 対外漢語を研究するんだったら, 実際は言語学にもっと偏ってるんだよね(うん)。うん, 勉強していることは, 全部中文系の学生と一緒に授業を受けてるんだよね。(あああ)]

本発表では、中国語と日本語におけるあいづちの特徴を記述することを通じて、今後のあいづちに関する対照研究の可能性について述べたい。

### 参考文献

- 安達太郎 (1999). 日本語疑問文における判断の諸相 くろしお出版
- 新井保裕 (2019a). SNS における省略現象の日韓対照研究—メディアに現れる「磁石」な日本語と「チェーン」な韓国語— 科研費成果報告公開シンポジウム日韓両語の「省略」は何を語るか—言語の個別性と普遍性に向けて—, 63-82.
- 新井保裕 (2019b). 社会言語科学と対照言語学—日韓対照を中心に— 社会言語科学会事業委員会主催 2019 年度第 1 回講習会『社会言語科学の射程』講義資料
- 新井保裕・生越直樹・孫蓮花・李東哲 (2019). 中国朝鮮族言語使用・意識の多様性に関する研究—朝鮮族学校でのアンケート調査— 社会言語科学, 22(1), 125-141.
- Besnier, N. (1992). Reported speech and affect on Nukulaelae Atoll, J.H.Hill and J. Irvin (eds.) *Responsibility and Evidence in Oral Discourse*. New York: Cambridge University Press, 161-181.
- Clerk, H. H., & Gerrig, R. J. (1990). Quotation as demonstrations, *Language*, 66-4, 764-805.
- Crystal, D. (2010). *Begat: The King James Bible and the English Language*. New York, NY: Oxford University Press.
- [邦訳: 橋本功・八木橋宏勇 (2012) 『聖書起源のイディオム 42 章』 慶應義塾大学出版会]
- Fujii, S. (2006). Quoted thought and speech using the mitai-na ‘be like’ noun-modifying construction, Suzuki, S (ed.). *Emotive Communication in Japanese*. Amsterdam: John Benjamins Publishing Company, 53-95.
- 橋本功 (2005). 英語史入門 慶應義塾大学出版会
- 橋本功・八木橋宏勇 (2011). 聖書と比喻—メタファで旧約聖書の世界を知る— 慶應義塾大学出版会
- Hayashi, Reiko (1988). Simultaneous talk - from the perspective of floor management of English and Japanese speakers. *World Englishes*, 7(3), 269-288.
- 堀口純子 (1997). 日本語教育と会話分析 くろしお出版
- 市川宙・徳永健伸 (2007). 情報探索雑談における自然なトピック遷移の実現 言語処理学会第 13 回年次大会予稿集, 151-154.
- 井出里咲子 (2014). スモールトークの公共性—アメリカ社会におけるおしゃべりとその詩的機能をめぐって 論叢: 現代語・現代文化, 12 号, 87-101.
- 井出祥子・藤井洋子 (編) (2014). 解放的語用論の挑戦—文化・インターアクション・言語— くろしお出版
- 一般財団法人日本聖書協会ホームページ「世界の聖書翻訳状況について (08. 04)」  
(<https://www.bible.or.jp/soc/hotnews0805.html>) (2019 年 12 月 30 日閲覧)
- 鎌田修 (2000). 日本語の引用 ひつじ書房
- 金子百合子 (2018). アスペクトの緩急とモダリティの濃淡: ノダ文をめぐる日露対照研究 (Mark Campana 教授退職記念号) 神戸外大論叢, 69(1), 123-149.
- Кронгауз, Максим & Такахаси, Кэнъитиро (2002). Обращение по имени в русском и японском языках. *Труды по культурной антропологии: Памяти Григория Александровича Ткаченко*. 252-274.
- 古代語研究会 (編)・谷川政美 (監修) (2009). 聖書ヘブライ語 サンパウロ
- 甲田直美 (2015). 語りの達成における思考・発話の提示 社会言語科学, 17(2), 1-16.
- Ларина, Татьяна (2009). *Категория вежливости и стиль коммуникации: Сопоставление английских и русских лингвокультурных традиций*. Москва: Рукописные памятники Древней Руси.

- Lucas, Stephen E. (2011). *The Art of Public Speaking*. New York: McGraw-Hill Education.
- 水谷信子(1983). あいづちと応答 水谷修編 話しことばの表現 筑摩書房
- 三宅和子(1994). 日本人の言語行動パターン—ウチ・ソト・ヨソ意識— 筑波大学外国語センター日本語教育紀要, 9, 29-39.
- メイナード, 泉子・K (1993). 会話分析 くろしお出版
- 中尾裕子(2003). ロシア語における指小接尾辞と日本語の 接頭辞「オ-」の対照研究 ロシア語研究, 16, 27-49.
- 中野清治 (2014). 英語聖書の修辭法と慣用句 英宝社
- 中園篤典 (2006). 発話行為的引用論の試み—引用されたダイクシスの考察— ひつじ書房
- 成瀬武史 (1996). 英日日英翻訳入門—原文の解釈から訳文の構想まで— 研究社出版
- 仁田義雄 (1991). 日本語のモダリティと人称 ひつじ書房
- 西田幾多郎 (2018). 善の研究 岩波書店
- 大津友美(2005). 親しい友人同士の雑談におけるナラティブ—創作ダイアログによるドラマ作りに注目して— 社会言語科学, 8(1), 194-204.
- 尾崎喜光(編) (2008). 対人行動の日韓対照研究—言語行動の基底にあるもの— ひつじ書房
- Прохоров, Юрий&Стернин, Иосиф (2007). *Русские: коммуникативное поведение*. Москва: Флинта-Наука.
- Searle, John. (1969). *Speech Acts*. Cambridge University Press.
- 田中聡子&ケキゼ, タチアナ(2005). 「顔」と《лицо》—「顔」概念の日露対照研究— 世界の日本語教育, 15, 103-116.
- ツォイ, エカテリーナ(2016). 「課題達成談話における発話の重なりに関する日露対照分析—重なった発話の構造および機能に着目して—」 ロシア語研究, 26, 65-89.
- ツォイ, エカテリーナ(2018). 「三者間の共同課題解決における「提案交渉」の日露対照分析—親疎関係の違いに着目して—」 社会言語科学, 21(1), 207-224.
- 寺澤盾 (2013). 聖書でたどる英語の歴史 大修館書店
- ウェインベルグ, ナジェージュ&松村瑞子(2015)日本語の「丁寧さ」とロシア語の「ウエジリボンチ」—類似点と相違点— 言語文化論究, 35, 57-69.
- 山口明穂 (2004). 日本語の論理—言葉に現れる思想— ひつじ書房
- 山口治彦 (2009). 明晰な引用, しなやかな引用 話法の日英対照研究 くろしお出版
- Земская, Елена, Китайгородская, Маргарита&Розанова, Нина(1993). Особенности мужской и женской речи. *Русский язык в его функционировании. Коммуникативно-прагматический аспект.*(под ред. Земской Е.А. и Шмелева Д.Н.) Москва: Наука, 90-136.